

【氏名】

石川 純子

(助成決定時) 東北大学大学院 国際文化研究科

【研究題目】

19世紀における南コーカサス・イスラム地域の社会・政治的変容

イラン世界から帝政ロシア支配下への変遷、アゼルバイジャン内陸部、カラバフ地方を中心として

【研究の目的】

ソ連崩壊後、力の空白地域であると考えられているコーカサス地方は、チェチェン問題に絡んだロシア・北オセチアでの連続テロ事件を受けて、今まで以上に注目を集めるようになった。ソ連崩壊によって、コーカサス山脈を隔てて地図上は分断されたかに見える南コーカサス地方も、北部の不安定地域と密接な関わりがあり、この地域の一部で起こった現象が地域全体に連動する状況にあることがテレビ・新聞等の報道で明らかになっている。今日のコーカサス地方を巡る問題にはロシアが非常に影響力のあるアクターとして絡んでいることがわかる。そこで現代の動きを紐解くためにも、ロシアがコーカサス地方を征服し帝国の範疇に入れた19世紀の歴史を詳細に検討する必要がある。とりわけ19世紀までイランやトルコを中心とする中東イスラム文化圏の支配・影響下にあった南コーカサス地方が、全く異質なロシアとその文化にどのように対応し、支配下に組み込まれていったのか、またそれに伴いどのような社会・政治的変容が生じたのかを研究することが重要であると考え、本研究の目的とした。

【研究の内容・方法】

南コーカサスの近代史を検討するにあたり、従来からの知識階層であり地域のリーダーとして社会的地位も高かったイスラム宗教指導者に着目した。彼らはイスラム諸学の修学や巡礼のため、また商人として頻繁に移動した人々であり、南コーカサスと中東文化圏を結びつける存在と考えることができる。したがってロシアがこの地域を中東イスラム文化圏から引き離し自らの支配下に組み込むにあたって、イスラム宗教指導者の扱いは大いに検討を要する問題で、その制度化までかなりの年月がかかった。本研究ではこのテーマに関連した同時代史料の収集が第一の課題であり、一次資料として使用できる以下の文献を入手した。

- 1 . *Kolonial'naja politika rossiiskogo tsarizma v Azerbaidzhane v 20-60 godakh XIX v.* 2vols. Moscow and Leningrad: Izd-vo ANSSR, 1936-1937.
(1820 60年代アゼルバイジャンにおけるロシア帝国主義の植民地政策)
- 2 . *Akty sobrannnye Kavkazskoi Arkheorograficheskoi Kommissieiu.*

Tiflis:1871,Kavkazskaja ArkheograficheskajaKommissija.

(カフカス古文書委員会収集記録集)

3 . Polnoe Sobranie Zakonov Rossiisoi Imperii. (ロシア帝国法典)

これらの一次資料のうち、イスラム宗教指導者を管理・統治するためのロシアの政策を辿るために、1840年代の報告書類、外交官・東洋学者であったハニコフによる1849年の試案、帝国のコーカサスでの対イスラム政策を決定付けた1872年条令を検討した。またイランの町タブリーズから南コーカサスに移住したシーア派イスラム僧に関して政府側が残している記録についても検討した。その他、同時代の社会現象を探る手段として新聞記事も入手した。(アゼルバイジャン、バクーで19世紀に発行されていたKaspîi, Ekinchiなどの新聞)

つぎに本研究のもうひとつの課題として、アゼルバイジャンの首都バクーを訪問し、同国の近代史研究状況を調査し研究文献を入手した。これにあたっては宗教指導者や宗教施設関連の研究に限らず、広く19世紀全般を扱う研究を調査の対象とした。また同国の文書館における史料配置状況を調査した。

【結論・考察】

上に挙げた一次資料の検討の結果、ロシア政府は制度上、宗教指導者の外国(イランやトルコ)との交流を大幅に制限した。これは北コーカサスで、中東や中央アジアから伝播したイスラム神秘主義の教団が対露抵抗運動の担い手となっていたことに端を発する。南コーカサスの諸都市には高等宗教教育施設がなかったため、外国での修学禁止は結果的に宗教指導者のレベルの低下を促進した。その一方でイラン出身の宗教指導者がコーカサスで非合法に活動していたことが研究文献から明らかになっている。

次にアゼルバイジャン共和国では現在のところ、宗教指導者や宗教施設に関する研究はあまり多くない。これは宗派・民族的に多様であるアゼルバイジャンにとって、このような研究が国家建設上必ずしも益にならないことに関連していると思われる。アゼルバイジャン北部地方で優勢なスンニ派の神秘主義に関する研究が最近出ている点が興味深い。北コーカサスでの対露抵抗運動と強固に結び付けられ、その発祥の地がアゼルバイジャンであることが強調されていて、かなり政治的な内容であると言える。現在のアゼルバイジャンにおける近代史の主なテーマは、移住に関するものやアゼルバイジャン民主共和国に関するもので、その大部分が強いナショナリズムに裏付けられている。

助成期間中に、副題に載せたカラバフ地方に特化した資料を収集することは、この地域が現在アルメニアの実権下にあることから不可能であった。しかしカラバフ地方を含むアゼルバイジャン南部一帯は、イラン北部の町タブリーズを中心とするイラン領アゼルバイジャン地方と文化・通商などの点で従来から密接な関係があることから、本研究では非常に重要な地域である。今後はイラン領アゼルバイジャン地方との人的交流と言う観点から

アゼルバイジャン南部一帯を見ていくと、新たな史料の発見も可能なのではないかと考える。現在までに集めた一次資料は、ロシア政府側が残した記録に限られているので、今後はイランに豊富な地誌を検討していく必要がある。これによって南コーカサスがロシアに併合された前後のイランとの人的交流を明らかにすることができると思う。